

ヨヤキン王の9年10月10日に、即ち、ゼデキヤの治世第九年の第十の月の十日に、バビロンの王ネブガドネツアルは全軍を率いてエルサレムに到着し、陣を敷き、周りに堡壘を築いた(列王記下25:1)とあるように、エゼキエルは、エルサレムが火の上の肉鍋になったと記せと告げられます。災いだ、流血の都よ。わたしもまた、薪の山を大きくする。…汚れがその中で溶け、錆がなくなるように。(24:9)と神の裁きの言葉が聞こえます。民は裁かれ、滅亡は時間の問題となりました。悲しみに沈むエゼキエルに主は告げます。



エゼキエルの妻の死 William Blake

人の子よ、わたしはあなたの目の喜びを、一撃をもってあなたから取り去る。あなたは嘆いてはならない。泣いてはならない。涙を流してはならない。声をあげずに悲しめ。死者の喪に服すな。頭にターバンを巻き、足に靴を履きなさい。口ひげを覆うな。嘆きのパンを食べてはならない。(24:16)と主の告げた言葉をそのまま捕囚の人々にも語りました。その日の夕べにエゼキエルの妻が死にました。エゼキエルにとってはさらなる打撃だったことでしょう。けれどもエゼキエルは喪に服さず、通常と同じく毅然とした態度を保ち、声をあげずに悲しみました。

故国の滅亡、妻の死は耐え難い悲しみで、受け入れ難いことです。しかし、嘆かずに、神の裁きを身に負い、それを受け止める信仰も与えられている。そのように生きていると語ることが、神が主であることを知るしるし、証しとなると語ったのです。ゼデキヤ王の治世11年10月に王国は陥落しました。逃れた者がそれを伝えたのは1年後の12年の10月でした。エルサレムの滅亡は**わたしが主であることを知る**時の始まりとなり、主はエゼキエルの口を開かせ、彼はもはや黙していませんでした。

イスラエルのあるべき道、将来の道をもう一度、神はエゼキエルに告げます。それは神に選ばれた預言者が**見張りの務め(33:1)**をして警告し、悪人を立ち帰らせ、正義と恵みの業を行わせることである、さらに、ちりぢりになって、迷うイスラエルの群れに**わたしは自ら自分の群れを探し出し、彼らの世話をする(34:11)**、一人の牧者を起こし(34:23)、**失われたものを尋ね求め、追われたものを連れ戻し、傷ついたものを包み、弱ったものを強くする(34:16)**と、神自らが救い主を起す、というキリスト預言をしています。イスラエルの周囲の国々は自分の恥を負うが、イスラエルの山々は、枝を出し、**イスラエルのために身を結ぶ。彼らが戻って来るのは間近である。(36:8)**と、回復の希望を告げます。

また、絶えず対立してきたイスラエルの周辺諸国への預言を語ります。アンモン、モアブ、エドム、ペリシテ、ティルス、シドンはイスラエルの滅亡に手を貸したゆえに、神がその復讐をし、略奪され、滅亡させると預言します。イスラエルは豊かな大国エジプトに依存する時もありましたが、脅かされてもきました。驕れるエジプトも、狂暴なバビロンに富を断たれ、倒され、剣で殺された者と共に40年横たわると預言します。出エジプトで味わった苦難の40年をエジプトも耐え忍ばなければなりません。しかし、40年後に繁栄を回復するが、それは小さな、ささやかなものだと預言するのです。



枯れた骨の谷 Gustave Doré

エゼキエルは霊によってある谷に連れ出されました。そこには非常に多くの骨があり、甚だしく枯れていました。主は「生き返ることが出来るか」と尋ねます。エゼキエルは「主のみがご存じです」と答えると主は「骨に向かって『お前たちの中に霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る』と預言せよ」と命じました。エゼキエルが命じられたとおりに預言すると、**霊が彼らの中に入り、彼らは生き返って自分の足で立った(37:10)**。故国、捕囚の民、また、最愛の妻を失って悲しみ、自分の足で立つのも苦しかったエゼキエルに示されたこの驚くべき幻は、神に命の息を鼻に吹き入れられて生きるものとなったアダムのように、神の霊によって、死んでいる者も生きる者となる信仰者の喜びと力を知らせるものでした。